

本稿は、以下のキャンベルレビューに基づいている

Murray J, Farrington D, Sekol I, Olsen R: Effects of Parental Imprisonment on Child Antisocial Behaviour and Mental Health: A Systematic Review (親の刑務所収容が子どもの反社会的行動とメンタルヘルスに与える影響) . Campbell Collaboration, 2009



本稿は、Anne-Sofie Due Knudsen (SFI Campbell) によって書かれ、レビューの著者によって承認されている。

[www.sfi-campbell.dk](http://www.sfi-campbell.dk) をもみよ

## 親の刑務所収容は、子どもの行動上の問題を予測する

子どもは、親が法を破り刑務所に入った際の隠れた被害者である。新たなキャンベルレビューによれば、親の刑務所収容は、子どもが心理的社会的な傷つきを被ることを増進している可能性がある。刑務所に親がいる子どもは、親が刑務所にいない子どもに比べて、行動上の問題と心理的な不健康を発達させる確率が2倍ある。

### 隠れた被害者

世界中でより多くの人々が服役している。その多くは、子どもが18歳未満の親である。親の刑務所収容によって、支援と注目を必要とする子どもの数もまた増加している。

児童期におけるしんどいできごとは、子どもがこうしたマイナスの経験を抱えて大人になる可能性があるため、長期的な結果を及ぼしうる。長い間、たとえば、親の離婚、親の病気、親の死亡などの子どもに対する影響には、大きな関心が寄せられてきた。しかし、親が刑務所にいる子どもは、これまででもそうであったが、現在も無視されているグループである。これらの子どもは、自分が最も近い存在から分離されるというしばしば苦しく困難な経験をもっともよく乗り越えるために、支援とケアを必要としている。

### 子どもは傷ついているかもしれない

この系統的レビューは、この分野の最良の研究をカバーした結果、実刑判決を受けた親の子どもは、著しいリスクに曝されていると結論している。具体的には、刑務所にいる親がいる子どもは、同様の経験をくぐり抜ける必要のなかった子どもと比べて、行動上・心理上の問題を発現させるリスクが2倍ある。

別の言い方をすると、研究者は、子どもの問題行動と、刑務所に自分の親がいるかどうかの間に関連を見つけたということである。しかしながら、これらの研究に基づき、研究者は、親の刑務所収容がこれらの問題を引き起こしているのか、あるいは、これらの問題がそれ以外の経験によって引き起こされているのかは、結論付けられなかった。たとえば、受刑者の子どもの多くは、親が刑務所収容される前から、困難な家庭・生活状況にある可能性がある。親の刑務所収容の経験よりも、むしろ、これらの困難が、彼らの行動上の問題の原因であるかもしれない。

訳 津富宏（静岡県立大学）2012年4月9日  
研究者は、これらの子どもが、一層の支援と注目を必要としていることを強調している。受刑している親との分離は、それ自体は、子どもの行動変化につながるとは限らないが、本レビューは、それが、一つの悪化要因になりうることを示唆している。

このレビューの結果に基づき、研究者は、子どもが不適応行動ないし心理的な苦悩を示しているとき、実務家は、受刑中の親がいることがもたらしうる結果について認識しておかなければならないと示唆している。

### 子どもに対する影響

親の刑務所収容が、どのように子どもに影響しうるかに関しては、多くの異なる理論がある。この経験は、たとえば、子どもが他者とつながる能力を妨げる可能性がある。家庭の生活状況は、親の刑務所収容に引き続く、収入の喪失などの負の経験のために悪化するるので、その程度に応じて、子どもが犯罪に手を染める可能性がある。受刑中の親が、子どもの監督とケアを行えないため、子どもが犯罪を行う可能性を高める可能性もある。同時に、子どもが不適応というラベルを貼られるリスクがあり、それが、犯罪の疑いをかけられるリスクを高めるリスクもある。これらのプロセスのいくつかは、子どもの犯罪行動だけではなく、子どもの心理的健康にも影響する可能性がある。よって、現行の理論によれば、受刑者の子どもが、社会的にも心理的にも害を被る可能性はある。これらの理論は、親の刑務所収容の子どもに対する影響は、親が刑務所に収容されるまで、子どもが親と住んでいた時に、最大となることも予測する。

親が刑務所にいることのもたらす負の結果を被ることを、子どもが避けるのに役立つ、さまざまな解決策がある。もっとも自然な解決は、刑務所にいる親の数を減らすことであろう。これは、実刑に代わる、代替策、たとえば、自宅拘禁、罰金、電子監視、集中的監督などを用いることで実現できる。これらの手段は、子どもとの分離を含まないので、子どもの日常に対して、より小さな影響を与えるだろう。

### レビューに関する事実

研究者は、親が刑務所にいることの、子どもに対する影響を調べた16件の研究を比較することにより、この結論に達した。これらのうち9件の研究では、親の刑務所収容は、児童期（0歳から18歳の間）に生じていた。一方、7件の研究では、親の実刑判決が子どもの出生前に下されたかあるいは出生後に下されたかは不明だった。研究は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、スウェーデン、デンマーク、オランダで行われたものだった。

先述したように、これらの研究は、刑務所収容をリスク要因として確定したが、因果的リスク要因として確定しているわけではない。研究者は、よって、親の刑務所収容が子どもの行動に与える因果的効果に関する具体的な結論を得るための新たな研究を推奨している。

系統的レビューの著者は、受刑者の子どものうち、どうして一部の子どもが問題行動を發展させ、その他の子どもは發展させないのかに着目した、新たな研究も期待している。

---